
愛してる、なんて言わないで。～大樹バージョン～

憂鬱なもののけ姫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

愛してる、なんて言わないで。 ～大樹バージョン～

【Nコード】

N0729P

【作者名】

憂鬱なものけ姫

【あらすじ】

愛羅の事が好きな大樹。でも愛羅にも好きな人がいた――。
しかし愛羅の好きな人は両思いとされている関係の人物がいるということ
ことで、それを見ている大樹も切なくなるだけだった。
そんなとき、『修学旅行』という絶好のチャンスが巡ってきて――
――？

（前書き）

初めての短編です。

かゝなり長くなってしまいましたが、読んでいただければ光栄です。

次は「愛羅バージョン」も書きたいと思っています。どうぞ、そっちのほうも

よろしく願います。

俺は今、恋をしている。

その相手にも好きな人はいるけれど。でもそいつの好きな人にも、好きな人がいる。

しかも両思いとされている関係で。

俺もアイツも叶わない恋だ。どうやっても、あがいても。

「愛してる」なんて言えない。「愛してる」と言わないでほしい。

自分もアイツもそうなんだ・・・・・・・・・・。

ピシッ、とおでこに痛みを感じ、顔を上げる。

「コラ、大樹！なにやってんだ！ボクッとしてるんじゃない！」
どうやら頭に当たったのはチヨークらしい。

3

「ス、スイマセン・・・・。ちょっと考え事してて・・・・。」

あわてて取り繕う。しかし、

「どうせ考え事しても勉強以外のことだろう？勉強のことを考える、勉強のことを！」

とあしらわれてしまった。クラスに笑われる。

2時間目の授業が終わり、中休み。

「おいおい、また考えてたのか？愛羅のことを。」

友達ともだちの輝也てるやが尋ねてくる。

「うん・・・まあな。でもそれだけじゃないぜ？考えてたのは。」

ごまかすけど本当は愛羅のことだけだった、頭の中は。

俺は板野大樹。高2のバスケ部、元気なまともの男子。

好きな人は高城愛羅。俺の幼馴染で、結構仲が良い。そこそこ美人で、笑った顔が可愛い。

まあ、そこは俺だけだと思うことなんだろうが。

「大樹！」

・・・あ、自分の愛しいひとが近づいてくる。

「おー、愛羅！どうした？」

こういう返事しかできない。

「あのねー、さっき海輝に話しかけられちゃった〜！」

「あーそう、よかったね（棒読み）」

「うわっ、なにその棒読み。」

「別に、いいじゃん、よかったね。」

俺がちよっと「よかったね」に心をこめて言ってみると、彼女は嬉しそうに顔を綻ばせる。

「ありがと。ははっ、いい奴だね、大樹は。」

やっぱり、愛羅が笑うと可愛いな。でも、毎日がこんな感じで、楽しい。

でも本当は「よかったね」なんて言いたくない。分かってる。

愛羅の想い人、「松島海輝」はこのクラスでなかなかの美男子でけっこうモテる。

そしてクラス一の美少女、「村田瑠奈」とは両思いというウワサが流れている。

まあ、その二人が本当に愛し合ってるのかは誰も知らない。

チャイムが鳴り3時間目。みんなが席に着くと先生が話し始める。

「・・・再来週に修学旅行がある。まずしおりを配るぞー。」

そう言っただけはしおりを前の人から後ろの人へと回させた。

「えー、突然で申し訳ない。言うのが遅れた。まず、この修学旅行での注意点は――。」

先生が長々としゃべっているうちに眠くなってきた。頭が――

「・・・というわけでくじ引きでの行動班決めをする！」

ひょいっと頭があがる。

「もちろん男女混ぜこぜだぞー。」

さらに先生が付け加える。

なに？・・・という事は俺も愛羅と同じ行動班になれる可能性があるということだろうか。

みんながくじを引いている。自分もあわてて引きに行く。

ドツドツ、ドツドツと自分の心臓が音を立てる。袋の中に手をつ込んで、「これだっ！」と

思うものを選び出す。

遠くで愛羅が言っていた。

「私、C班だった〜！」

一緒になるためにはC班になればいいということか。よし、見るぞ。

紙をあける。曲線に描かれたアルファベットが見える。

こだった。紛れも無く。それは。

「・・・いやった〜！！！」

叫び声をあげる。

「ん？どうした？うおっ、俺と一緒にだぜ！やったな！」

輝也も言った。

「あ、愛羅も一緒なんだ！」

震える声が出る。

「ヒュ〜！！そうなんだ、俺たちもできる限り後押しするぜいっ！」

「お、おう、ありがとな」

やっぱ友達って頼りになるな・・・。

「まあなっ！・・・おれも春美ちゃんもCなんだ！お前こそ応援しろーお！」

輝也の好きな人は氷野春美（こいの・はるみ）という人だ。

「氷」と「春」という字が対照的で、それが性格にまで現れている。冷たいところもあるし、温かいところもある。まあ、良い奴なのではないかと俺は思う。

でもいつもはクールだ。

「・・・あなたたち？C班は。」

春美がクールに言い放つ。

「おい！春美いゝ？」

駆けつけてきた愛羅。

「愛羅？C班はここよ。」

「え・・・。。。。。」

愛羅の瞳が自分と輝也を眺め回す。

「あなたらと？」

「そ、俺達と。」俺が言つと愛羅はすぐに反応を示した。良い方向にだ。

「わあーっ、大樹達と？嬉しい！海輝くんとなれなかったのは残念だけど、他の男子よりずっと
ましだわ。」

うんうんとうなずきながら言つた。

俺は凄く嬉しかった。

学校が終わり、帰る。いつもは俺と愛羅と輝也と3人なんだが、なぜか輝也が

「今日、ちょっと一緒に帰れねーわ！二人で帰ってて！」
と言つた。

俺はすぐさま輝也にささやきかけた。

「おいおい、いままで3人で帰ってきたじゃねーか。今頃どーした

？」

「ちよつと春美に呼ばれてるんだよ。」

「両思いになれるよう、祈ってるぜ！」

「あんがとよ。多分ちがうだろーけど……。」

そう言つて俺達は会話を打ち切つた。

「おーい！愛羅！今日は二人で帰るぞ！」

なんか自分で言うの、恥ずかしいな……。

「なんで？輝也は？」

「なんか春美に呼ばれてるんだとよ！」

下駄箱で靴を履き替え誰もいない道を二人で歩く。

「あ、そついえば今日春美好きな人に告白するって聞いたよ！きつと輝也のこと好きなんだわ！」

「おおそれは奇遇。実は輝也も春美のこと好きでねえ。よかったよかった。」

俺がわざとおどけて言つと愛羅が笑い出す。

「あはは！おつかしー！」

そつして俺達はニヤニヤと笑いながら帰つたのであった。

次の日。

ピンポン。自宅のベルが鳴る。

「おはよう、大樹！……まだ？」

愛羅だ。

「わりわり、ちよつと待つて！」

ドタバタと階段を下りる。

「愛羅！おはよ、待たせてゴメン！行こーぜ！」

「うん、おはよ。」

そういつて俺達は輝也の家へと向かった。

「昨日、春美とどうなったのかしら」

愛羅が突然言った。

「両思いになってるといいけど……。」
俺も返す。

ピンポン。愛羅が2回目のボタンを押す。

「愛羅と大樹で〜す！」

「おゝ、おはよう。」

輝也も元気だ。

愛羅がドアを閉める。

「さて。」

愛羅と俺の声が重なる。

「昨日の結果はいかに？」

またまた異口同音。

「……俺のこと好きだってよ……！」
輝也が叫ぶ。

「……良かったじゃねーか……！」

俺も叫び返す。

「やっぱり……。」

と愛羅が言った。

「あははっ！」

朝の澄み切った空に俺達の笑い声が響きわたった。

学校。

「あゝあ、まさか輝也に先を越されるとは……。」
「え、大樹好きな人いるの!？」

あ、やべ、万が一のために言ってなかったんだっけ。

「あゝそうそう、いるんだよ。名前はな、たゝ、かゝ……。」

「おいつ、やめろよ!!!」

ばらしそうになった輝也の口を何とかふさぐ。

「ま、いいけど。でもいつか教えてよ。」

良かった。怒ってくれなくて。

今日はとうとう修学旅行。

駅で集合なので愛羅達とは別行動だ。

駅に着いた。まず最初に会うべき人はやっぱ……。

「おう！大樹いつもと違って遅せーなー！！」

元気な様子の輝也と、

「おはよう、この2泊3日よろしくね。」

とクールな春美。そして……、

「おっはー！遅いじゃない。まあ、いつもの事だけど（笑）」
と笑いかけてくる愛羅。服装は制服だが、かなりのアレンジを加えている。かわいい。

髪はポニーテールに結っており、シュシュの飾りが付いていた。

「さあ、電車乗るぞ。」

先生の声がかかる。

「行きますか！」

俺達4人はバッグを背負い、歩き出した。

ガタン、ゴトン。ガタン、ゴトン。電車で揺られる。

「いえい、上がりー！！」

「げっ、俺ビリじゃん！愛羅、なんてことをしてくれた！」

ババ抜きで、俺と愛羅のビリ争いの結果である。

「よし、もう一回！！今度は負けん！！」

意気込む俺1人に呆れた3人。

「全く……。」

そんなことをしながら俺達の乗った電車は進んでいく。

「・・・着いた〜!!!」

日光、今回の場所は日光である。

「おい、あれ日光東照宮!!!」はしゃぐ俺。

「あ、本当だ、カメラ!!!」カメラで撮ろうとする愛羅。

「輝也、私と2ショット、お願い、駄目?」意外とおねだりな春美。

「え、2ショット・・・?!」(照)「デレまくる輝也。」

「並べよ。2ショット撮らせてあげるから!」

「そうそう、任しといて!」

俺と愛羅のせめての頑張り。

「はい、チーズ!」

パシャッ!とフラッシュが光る。

画面にはピースに笑顔の輝也と春美の姿が。

「よく撮れてるね。さすが高性能!」

春美が思わず感嘆の声をあげる。

「さあさあ、お礼に愛羅と大樹に2ショットを」
輝也が張り切った声で言う。

「え? いや、俺達はいから・・・。」

「うん、輝也たちだけで十分よ・・・。」

と遠慮する俺達を無理やり撮影しようとする。

「いいから、写りなさい!!」

春美にどん、と背中を押された愛羅はまっすぐ俺の腕の中へ。

「え。」と思った瞬間にフラッシュがなる。それは愛羅も同じだっただろう。

「やったあ、作戦成功♪」

喜ぶ輝也たちに俺らは、

「こんりやるゝ……。」

と怒り爆発寸前だ。でも俺はそれほど怒っていなかった。むしろ感謝しているくらいだ。

一応演技、と言う事で。

一夜は過ぎ、次の日。

今日は源泉だ。先生が言った。

「今から自由行動だ。まあ、班行動の、だがな。お前ら精一杯10円玉磨けよ。」

という声に笑い声が起こった。

「あれ!?!10円玉が無い!?!どうしよう!?!」

愛羅が困ったような声で言った。

「無いのか?だったら俺の使えよ。」

俺が迷わずそうした行動だった。

「え、ありがとう!終わったら返すね。」

「いいよ、別に。お土産代なんかに使えよ。」

「いいの?ありがとう!大樹に感謝」

愛羅が笑った。俺はこの笑顔を見るために生まれてきたのではない

のかと思うときがあったが、
そのたびに、それは考えすぎだ、と思い直すのであった。

ごしごし。いくら磨いても10円玉が綺麗になるのは一向に見えない。

むしろ汚くなっていくような・・・？と思っていた。

「大樹、綺麗になった？」

愛羅がいららとした声で言った。

「全然。むしろ汚くなってる。」

「輝也はどう？」

「俺もだめ。全く。なあ、春美？」

「私もよ。黒くなっていくばかり。」

4人全員失敗したらしい。俺達は肩を落としてバスへ帰っていくのであった。

次は華蔵の滝。

「うわゝ。凄く迫力あるわね!!」

最初に口を開いたのは愛羅だった。

「本当。綺麗ね、輝也。」

春美が言った。

「そうだな・・・。あつ！虹が見える!!」

「えっ、どこどこ?!」

俺も躍起になって探す。

「あつ！あつた！」

それはとてもとても大きい七色の虹。

「綺麗・・・・・・・・。」

愛羅が呟いた。

「そうだな．．．．．」

俺も返した。

2日目の夜。「楽しかったな．．．．．」

輝也が言った。

「俺、ちよつと水買いに言ってくる。」

そう言つて、部屋を出た。

カツ、カツ、カツ、と廊下を歩く。

「修学旅行も終わりか．．．．．」

愛羅と過ごした日々も消えてしまう。いや、消えるというわけではないが、一番そばにいたということ、けっこう寂しかった。

いきなり、ガチャン、とドアがいきなり開いた音がして愛羅が飛び出してくる。

確かあの方向は．．．村田瑠奈の部屋ではないだろうか。

俺のすぐそばを通り過ぎていく愛羅。俺はその腕を反射的につかんだ。

愛羅が叫ぶ。

「放してよ！．．．！放して！．．．！」

もの凄い力で振り払おうとする。

その腕を全力で押さえつける。

「だって！．．．！だって！．．．！好きなんだもん！．．．！海輝の事が！．．．！」

「！」

愛羅が泣き叫ぶ。ものすごい声で。そのせいか他の部屋から人が飛び出してくる。

俺だって好きだよ、お前の事。でも声にできない。できないから。

だから想うだけ。

本当は抱きしめたい。心まで。締め付けるように。なのに。

お前はあいつの事を想って。

泣いて、叫んで、泣いて。

もう耐え切れない。

「俺だって好きなんだよ！！お前の事が！！なんで分かってくれな
いんだよ！！」

分かってる。こんなの自己正当化だって。ただ愛羅に八つ当たりしてるだけ。

「え・・・・・・・・・・・・・・・・？」

愛羅は呆然としている。俺はさらに続けた。

「小さいころからずっと・・・・・・・・、好きだったんだよ・・・・・・・・。
最後は呟きになり、声が低くなる。」

するといきなり愛羅が俺の胸の中へ飛び込んできた。

「・・・・・・・・つく・・・・・・・・つく・・・・・・・・。」

泣いていた。俺はそれを包みたかった。腕で愛羅を抱きしめる。

「多分、まだ忘れられないと思うけど……。海輝への想いはまだ消せないと思うけど。」

でも消したい。大樹のためにも。」

「大樹のため」？俺のため？……ということは……？

「大樹の彼女にならせて。」

一言だった。迷いも無く、真剣な目で自分を見つめてくる。

「喜んで。」

そうして腕の中の愛羅に長くキスをした。

その瞬間周りがドツ、と湧く。

周りにはたくさんの友達、そして輝也と春美がいた。

俺……、この恋を諦めなくて良かった！！！！
本気でそう思った。

修学旅行は終わり、愛羅と2人の帰り道。

「楽しかったー！！」

笑顔でいう愛羅。

「……………」

「どうしたの？」

「俺、愛羅の事放すつもりないぜ？それでもいいの？」
愛羅はビックリしたような顔をしたが、すぐに言った。

「それでもいいよ。だって言ったのは私でしょ？」大樹の彼女にならせて『って。』

「・・・そうだな。」

そう言って、俺達は2回目の口付けをした。

愛の証というように。

（後書き）

本当に長くなってしまつてスイマセン。

「愛羅バージョン」もお楽しみに！！！！

読んでくださつてありがとうございます！！！！！！！！！！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0729p/>

愛してる、なんて言わないで。～大樹バージョン～

2011年9月8日16時53分発行